

時間をどのように再現するのか

戸田 穰

「再現」に類する建設的行為には、「復元」「復元」のふたつの用語がある。「復元」(restoration)とは、現存する建物にたいして、その価値付けをある特定の時代に求め、その時代の姿に復することをいう。対して「復元」(reconstruction)は、もはや存在しないものを、改めて建設する。元なる英語を素直に訳せば「再建」である。再建という語そのものは、必ずしも破壊前の姿に戻すことを意味しない。たとえば東京駅は空襲で被災したが、戦後「再建」され、そして近年戦前の姿に「復元」された。戦災復興に際して、市民の記憶のなかにはまだ生きている、都市の歴史的景観を取り戻すためになされる再建行為はまさに復元であった。

ここに紹介したいのは平城宮跡に復元された朱雀門(一九九八年竣工)である(図1)。誰もそれを見たことがないのだから、このような再現実業には批判が多い。これを「復元」「復元」と言われればやはり違和感があり、再建というにも千年の昔である。「復元的建設」とするような用語の整理はあつてよいと思うが、ひとまず再現と呼んでおく。ここでは、事業に対する原理的な批判はひとまずおいて、その再現のプロセスを改めて紹介する。

朱雀門は平城宮のいわば正門にあたる。その姿を証する史料は乏しい。地中に埋蔵さ



図1 復元した朱雀門 写真提供:平城宮跡資料館

れた遺構からは、基礎から基壇が、柱の位置から平面規模が類推されるだろうが、上部構造については奈良時代の類例と関連資料からの推察ということになる。とはいえ、奈良時代までの遺構は寺院に限られ、十寺二十五件にすぎない。こうして再現過程はキマイラの様相を呈してくる。

まず構造形式については、平安後期に描かれた『伴大納言絵巻』にみられる平安宮朱雀門に倣って、平城宮朱雀門も二重門であろうと設定し、この形式における古代唯一の遺構である法隆寺中門に範を求めている。一方で、細部の様式は、構造形式に対して時代による変化が大きいものだ。法隆寺中門と朱雀門のあいだにも四十年ほどの隔りがあり、そのまま倣うことは難しい。そこで、意匠においては、同時代の薬師寺東塔の様式を参考にする。とはいえ、薬師寺東塔は塔建築であり、朱雀門のような大門という建築類型に、部材寸法や比例関係をそのまま適用することにも難しとはしない。これらについては奈良時代の門建築の類例である東大寺転害門に類例を求めている。さらなる細部には、海龍王寺五重小塔のような現存建造物だけでなく、四天王寺、薬師寺、唐招提寺、太平寺、難波宮等々からの出土品をもとに類推する、等々。このようなキマイラ的な性格を辿り直してみれば、いまその地に立つ再現された姿は確固としたものながら、その実像は、七世紀後半から半世紀以上の一定の時間の幅のなかでのゆらぎのイメージとして立ち現れてくる。

こうした類例からの類推による全体像の再現とは別に、もうひとつの仮定が朱雀門には導入されている。問題は構造補強についてである。『平城宮朱雀門の復元的研究』には「調査研究会記録」が掲載され、議論の様子が伺える。一九八九年六月七日の第三回研究会会議では「古代建築を復元する際の構造理念」について議論がもたれている。内田祥哉(建築家、建築構法学)は、ふたつの方向を提示している。ひとつは現代の技術(鉄骨)で主構造をつくり、その上に外観を木造で再現するもの。もうひとつは、やはり当時の木造技術で再現して、不都合な箇所につっかえ棒をするなど二次的な補強をするものだ。前者を外観復元論、後者を構造分離論と呼ぼう。実はつっかえ棒についてはすでに議論があった。復元設計の際に参考にされた先述の『伴大納言絵巻』では、応天門が軒下につっかえ棒をした状態で描かれているのだ。しかし、やはりみつもまないで、むしろ軒の出の長さを縮めることとなったという経緯が、金多潔(建築構造学)から紹介されている。

結局、内田の(……)これだけのことをしないと昔の建物はだめなんだという方が信実を伝えるという意味では正直だと思ふ。みつもまないことになるけれども。」という発言を

機に、研究会では外観復元論と構造分離論とで議論されるように思えた。ところが伊藤延男(建築史学)が折衷案ともいべきものを提示する。伊藤のアイデアは、「中世以降の知恵も入れて(……)でも構造的安定をはかり古代建築のもつ欠陥を補う」というものであった。構造分離論でもなく外観復元論でもなく、中世の木造技術による古代構造補強

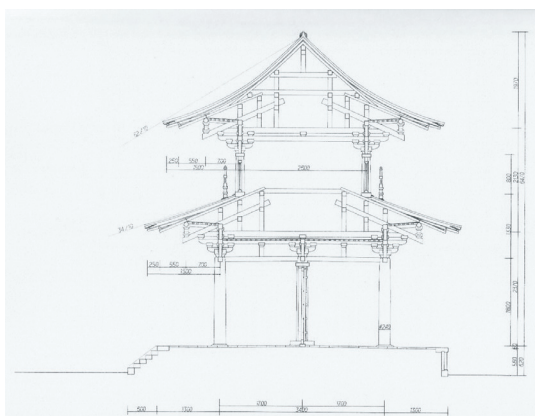


図2 朱雀門 最終復元案3 梁行断面図 出展:参考文献1(図9)

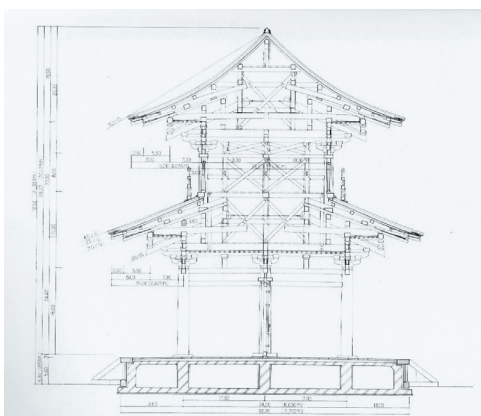


図3 朱雀門 復元実施案3 梁行断面図 出展:参考文献1(図15)

論である「図2、3」。この方針は基本的に受け入れられる。一九九三年八月十日に開催された第六回研究会会議では、稲垣栄三(建築史学)が「(……)朱雀門が中世まで生き延びたとして中世の人ならたぶんこういう補強をしただろうという想定は理論的に筋が通っていると考えられるから」と述べており、木造での補強はすでに共有されていた。議論は、その補強技術を中世のなかでも一三世紀か一四世紀か特定できないかというところに移っている。

平たく言えば再現朱雀門は二〇世紀後半の新築物件に過ぎない。とはいえ、そこどのようなイメージが託されていたかを考えることは、意味のないことではないだろう。二〇世紀後半の日本で行われたこの再現事業には、一九世紀西洋の歴史的建造物の修復でしばしばみられた「過修復」のような過去の理想化がない。「朱雀門が中世まで生き延びた」という想定そのものが理論的であったかどうかはさておいても、復元されたのは、古代の朱雀門なのか、中世の朱雀門なのか。そもそも存在しなかった中世朱雀門の建設は「復元」と

呼べるのか。あるいは、そこに朱雀門が生き延びた中世の奈良を想像してみるべきだろうか。しかし、第一大極殿などその後も再現の進んでいる平城宮跡の示す世界は古代の奈良に違いない。朱雀門は平城宮のシンボルであるとはいいが、その象徴は深層においてキマイラのイメージをもち、そこに立つ姿は技術的に検討された結果である。ふたつのイメージのあいだに、「中世まで生き延びた」というフィクションが横たわるのだが、果たしてその落差は埋められているだろうか。結局のところ、このような再現行為が想像でしかないならば、その意味は、新たにどのようなフィクションを構築しようとするのかという意志にかかっているのではないだろうか。(建築史、金沢工業大学環境・建築学部講師)

参考文献

- 1 『平城宮朱雀門の復元的研究』奈良文化財研究所学報、第五三冊、一九九四年。
- 2 『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究』全四巻、奈良文化財研究所学報、第七九―八二冊、二〇〇九―二〇一〇年。
- 3 鈴木博之編『復元思想の社会史』建築資料研究社、二〇〇六年。

後記 「造形作家による映像表現」「過去の空間・時間の再演」という、「Re: play 1972/2015」展のコンセプトに関わるテーマについて二名の方にご執筆いただいた。

正木基氏が、一九七〇年前後の美術における映像を検証する「現代美術としての映像表現」を企画されたのは一九八八年のこと、その時点ですでに、作品が失われることへの危惧があったという。正木氏の企画によって発見・救出された作品は多く、氏の炯眼と行動力がなければ、本展の在り方もまったく別様となっていたであろう(そもそも企画を思いつきえなかったらどう?)。

建築史をご専門とする戸田穰氏には、一九九〇年代に行われた平城宮朱雀門の再現を題材に、その興味深い「キマイラの様相」をご紹介いただいた。規模は違えど、本展の会場構成においてもこれと似たプロセスが踏まれているのだが、「平たく言えば再現朱雀門は二〇世紀後半の新築物件に過ぎない」という一見つき放したような氏の一文は、「再現」という問題を考える際の根本に据えるスタンスとして、かなり重要なものではないだろうか。(企画課主任研究員 三輪健仁)